

南アフリカでの学び： アパルトヘイト、人種差別、ゼノフォビア Students' Learning in South Africa: Apartheid, Racial Discrimination, Xenophobia

米川 正子／Yonekawa Masako

2026年2月に、神戸女学院大学のフィールドスタディー（FS）として、私と植田由希氏（本学非常勤講師）は本学学生8名を南アフリカ（以下「南ア」）に引率した。学生全員にとって、サブサハラアフリカへの渡航は初めて。このFSの目的は、1）アパルトヘイトの歴史、2）人種差別と難民・移民に対するゼノフォビア（外国人嫌い）、そして3）パレスチナ・ガザ地区における「ジェノサイド」に関して、南アの国際司法のリーダーシップを学ぶことであった。3つの目的の内、時間的な制限もあって、主に1）と2）について学んだ。

なぜ南アをFS先として選んだのか？ 私は南ア研究者ではないが、同国になじみがある。1994年の大統領選挙に国連オブザーバーとして派遣され、ケープタウン大学大学院に留学し、出張や旅行で何度も訪れた。その過程で、世界の人々が南アの歴史や政治から学ぶことが多いことを実感した。特に上記の2）は世界各

地で起きている現象であるため、当然、日本にとっても他人事ではない。

事前研修の一環として、学生は映画『サラフィナ！』と『遠い夜明け』を鑑賞し、アパルトヘイト、ゼノフォビア、南アとパレスチナの関係に関する資料を読んで議論した。また駐日南ア大使館のハリブ ジェッピー (Ghaleeb Jeppie) 公使にも講義をしていただいた。現地ではケープタウン、ジョハネスバーグとプレトリアに計10日間滞在しながら、アパルトヘイト、奴隷、ジェノサイド、District6 など7つの博物館、ソウェトなどのタウンシップ、難民の職業訓練と学習施設を見学したり、大学教員、学生、難民・弁護士、パレスチナ活動家、反アパルトヘイト運動家、移民や難民との対話の機会を設けた。下記に、学生らが南アで何を感じ、何を学び、どのような疑問を抱いたのかについて紹介したい。

「心の揺さぶり」がもたらした「本物の学び」 “Real Learning” Through “Heart-Stirring Experiences”

尾坂 麻理子／Osaka Mariko

本FSに参加した動機は2つある。1つ目は、差別やアパルトヘイト、ゼノフォビア、ジェノサイドなどの複雑な社会問題を現地の人々の視点から深く学びたいと思ったからだ。中学生の頃、部落差別の歴史を学ぶために、博物館を訪れたり当事者から経験談を聞いたことが今でも印象に残っている。だからこそ、南アでも教科書や本を通してだけでなく、現地の人の声から学びたいと強く思った。2つ目は、教職課程の履修を通してさまざまな教育問題に関心を持つようになったため、南アではアパルトヘイト終焉後^{しゅうえん}も教育格差が続い

ているのか、また教育がどれくらい社会に影響を与えているのかについて、現地の人々から直接聞きたいと考えたからだ。どこの国の差別も根深いため、どのリーダーも差別をなくすことは到底できないだろうが、まず自分の目と耳と心で現実を知り、本FSでの学びを多くの人に伝えることが私にできる一歩だという強い想いがあった。

南アではまさに「心の揺さぶり」を感じる毎日であった。学校で受ける座学での講義は、どうしても試験のための暗記や正解を素早く出すことが重視されがちだ。

米川 正子（ヨネカワ マサコ） 神戸女学院大学国際学部教員。専門はコンゴ民主共和国とルワンダの政治、難民研究。元国連難民高等弁務官（UNHCR）職員としてルワンダ、コンゴ、ジュネーブなどで勤務。主著に『世界最悪の紛争「コンゴ」－平和以外に何でもある国』『あやつられる難民－政府、国連、NGOのはざまで』。

しかし本FSは、このような学びの形式とはまったく異なった。例えば、歴史の教科書は主要な人物による主な出来事の一部のみが記載されているが、現地では「アパルトヘイト」という文字だけでは決して理解できない、一般市民が直面した「隠れがちな、不可視化された問題」を聞いたり見たりすることで考えさせられることが多かった。これが「心の揺さぶり」へとつながったのだと思う。

本稿では主に3つの点で経験した心の揺さぶりについて共有する。1つ目は、アパルトヘイト博物館、奴隷宿舎（Slave Lodge）、ホロコーストとジェノサイド・センターで経験した。出生地や民族、人種などが原因で差別や暴力を受けたり殺害された人々の写真、家族を失った人々の動画などに大変な衝撃を受けた。そこでさまざまな疑問が浮かんだ。なぜ人種が異なるだけで差別されるのか、なぜ過酷労働が強いられたのか、なぜ人間全員が人間的な生活が営むことができないのか、なぜ人々は偏見を持つのかなど。考えれば考えるほど、私のモヤモヤは膨らむ一方で涙が止まらない時もあった。おそらくそのような感情を抱いたのは、私が過去に学校でいじめられた辛い経験があるからなのだろう。もちろん私の経験とアパルトヘイトという人種隔離の制度は到底比較できないものの、博物館で自身の経験と上記の犠牲者の写真を重ねてしまい、アパルトヘイトは決して人ごとではないとも痛感した。

2つ目の心の揺さぶりは、ケネディ ギハナ（Kennedy Gihana）さんとの出会いを通じて、私がこれまで持っていた教育観が根底から変わったことである。ルワンダ出身の彼はもともとルワンダ愛国戦線（RPF）で少年兵として戦い、ウガンダからルワンダに帰還したものの、教育の機会が与えられなかった同国での独裁政権に嫌気をさし、将来、大学に進学し「大物になる」ために、ルワンダから南アへ約5,000kmも徒歩で移動した。その際、彼は高校の卒業証書をなくさないために、ビニール袋に入れて体に縛り付けて移動した。

彼は南アに到着後の半年間、移民、麻薬と犯罪で悪名高いヒルブロー（ジョハネスバーグ市内）にて、スーパーマーケットの外で客の買い物袋を運んでチップをもらいながら生活していた。そのような過酷な状況下でも、彼は決して学ぶことを諦めず、数年後にプレトリア大学法学部に進学。一時はホームレス状態になったため、24時間開館している大学図書館で寝泊まりしながら、最終的に法学修士号を得て弁護士になった⁽¹⁾。このような想像以上の苦勞をしてまで誰よりも学ぶことを重要視してきたからこそ、「教育は人生を切り開く力を持ち、生きる武器だ」という彼の言葉には重みがあり、説得力があった。私がそれまで考えていた教育とは単なる知識の詰め込みだったが、人々の未来を守るための生きる基盤であることを教わった。

またケネディさんが難民であるために、ゼノフォビアを何度も経験したことや、世界各地で起きているゼ

ビクター マトムさんの案内でヘクター・ピターソン博物館を訪れる

南ア・ジョハネスバーグ 2026年2月 写真提供: 米川 正子



ノフォビアについて話がでた。生まれつきゼノフォビアの人間はいなく、特定のリーダーが権力を握るためにゼノフォビアを意図的に掻き立てていること、またゼノフォビアの一因として、一般の人々が相手（国）を知らないために恐怖を抱いていることを挙げ、日本人が外国人に恐怖心を抱くのはまさに同様な一因があるのではないかと指摘した。彼が私たち学生が渡航前に抱いていた、南アあるいはアフリカのイメージについて聞いたので、私たちはアフリカに関して、貧困、紛争、治安の悪さなどネガティブなイメージがあり、参加学生の家族から南アは危険な国であるため渡航を反対された人もいたことを話した。「では実際に来てどうですか？」とさらに聞かれ、「イメージと全然違っていた。国は発展し、想像以上に安全だし、人々は優しい」と答えた。

そう、私たちは南アとアフリカに対して相当な偏見を持っていた。このようなイメージや偏見を、現地に行ってもいないにもかかわらず、私たちはいつの間にか鵜呑みにしていた。このようなアフリカの悪いイメージや偏見は、誰が、何のためにつくったのだろうか？と疑問に残る。メディアや教育者にも責任があるだろうが、われわれ一般市民も、そのような偏った内容の報道や教科書を疑わなかった責任があるのではないかな。なので、ケネディさんが偏見を抱いたり払散する危険性を警告し、実際に海外や現場に足を運んで自分たちの目で現状を確認する重要性を強調した際に、彼の言葉に納得できた。まさに偏見をなくすための教育の重要性を再確認できた。

3つ目の心の揺さぶりは、ベテラン写真家で反アパルトヘイト運動家であったビクター マトム（Victor Matom）さんとの出会いの際に起きた。彼が写真家になったのは、写真を通してアパルトヘイトの真実を伝え、その記録を残したかったからである。カメラは彼にとって武器である。AIは簡単にウソをつく一方で、写真は真実を伝えと強調していた。確かにAIが急速に発展し、私たちは情報らしきものを簡単に取得できる時代だからこそ、真実を撮影した写真の力がより一層重要になることを痛感した。

写真以外に、もう一つ真実について考えさせられる

ことを話してくれた。ビクターさんは映画『サラフィナ!』の舞台となった高校に実際に通学し、ソウェト蜂起の代表的な写真に写っている女子生徒の同級生だった。本映画中で、主人公のサラフィナが「(歴史の)教科書はウソだらけ」と言ったり、メアリーという歴史の教師が黒人、またはアフリカ主体の歴史を教えたことについて、ビクターさんの教師も実際に教科書に記載されていることが不正確だったことを話したという。その経験があったからこそ、「(真実を教える)教育は大変重要だ」、「歴史教育には自分たちの未来を変える力がある」「自分のルーツを知ることは大切」、「(正義実現のために) Never give up!」という彼の言葉に説得力があった。

私はそれまで教科書などに記載されている情報を理解することで、過去の歴史を学んだつもりでいた。その理由は、これまで教科書などの内容の暗記に必死だったため、その信ぴょう性を疑ったことがなかったからだ。しかし、実際には必ずしもそうではないことに気づいた。私は、現地主体で、かつ真実を伝えた歴史教育の重要性を『サラフィナ!』とビクターさんを通じて知ることができた。

あとでノートをふりかえると、実は歴史教育がどれだけ人を動かす力があるかについて、渡航前にジェッピー公使から聞いていたことに気が付いた。公使いわく、白人の歴史には現地の黒人が不在だった。しかし講義時、聞き慣れない南アなまりの英語での話を聴き、

講義の内容をノートに書くのに必死で、講義の重要性を咀嚼する余裕がなかった。歴史教育の影響^{そとへ}力についてやっとわかったのは、アパルトヘイト博物館での心の揺さぶりに加えて、ケープタウンで裕福な白人と日雇い労働者の黒人間といった明白な人種格差の光景を目にし、『サラフィナ!』の撮影現場やヘクター・ピーターソン博物館に足を運んだり、ビクターさんらから話を聞いたからである。大学での講義は重要だがそれには限界があること、そして現地で時間を過ごしながら、そこの独特の雰囲気と光景の中で勉強すると頭に残りやすく、理解がより深まることを強く実感した。

以上、南アでの経験を通して、歴史を含む教育は人の心を動かさないと意味や影響がなく、そして人間の生き方を問い直す力であることを深く学ぶことができた。私はこれまでの人生で、これだけ真剣に様々な物事について、時には涙を流しながら考えたことはなかったかもしれない。単に知識を詰め込むより、頭で考える上に心で感じる経験は、必ず「本物の学び」に、そして将来の自信にもつながるだろう。読者にも人間の五感をフルに活用できる南アでの本物の学びを体験してもらいたいと願っている。

(1) 詳細は "Jacques Pauw, *Rat Roads, One Man's Incredible Journey*, Penguin Random House South Africa, 2016" を参照。

尾坂 麻理子：神戸女学院大学文学部英文学科4年生

無関心と正義感、自他への優劣意識の危うさ Danger of Indifference, Injustice and Superiority

木村 和香／Kimura Waka

私にとって記念すべき人生初の海外渡航が、今回の南アだった。どこでも寝ることができ、何でも食べることができ、好奇心旺盛な性格が功を奏したと思う。18時間のフライトが退屈だったこと以外に特に困ることはなく、10日間で4キロも体重が増えたほど現地の食事を満喫した。

本FSへの参加動機のひとつは、身近で聞く外国人に対する差別発言や外国人排斥に日々違和感を持っていたために、なぜ差別発言をするのか、差別発言は何をもって正しくないのか答えを探してみようと思ったからだ。差別発言が正しくないとは分かっているのに、私には反論する勇気も、論理的に説明するための知識も持ち合わせていなかった。

FSでは主に3点について考えさせられることが多かった。1点目は黒人差別やアパルトヘイトによる人種

格差の根深さ、および南アの抗議文化について。アパルトヘイトの制度は突然成立されたのではなく、数百年間続いた奴隷貿易、そしてその後の植民地支配という土台があったからこそ導入された。そのような複雑な事情を知るにつれて、差別的な社会構造という大きな歴史の壁が私の四方に立ちはだかつて、その解決策を考えるだけで、自分というちっぽけな人間一人では無力であり、どうしようもない絶望感に似た気持ちを抱いた。辛くて悔しくて涙が出てきた。しかしビクター・マトムさんがヘクター・ピーターソン博物館前で「Never give up!」と力強く言った際に、差別と暴力と闘ってきた彼がそう言っているのに、それを経験していない私が果てしない差別に立ち向かうことを諦めてしまっていたことに気づかされた。彼に対して申し訳ない気持ちで一杯だった。

元学生運動家で、Palestine Solidarity Alliance のメンバーのタリック (Tarik Lalla) さんの話から、アパルトヘイト時代に不正義と闘った市民が多かったこともあり、その影響で南アの人たちの政治意識は一般的に高く、抗議文化が日本よりも盛んであることを知った。今回の訪問時期が学校の新年度だったこともあり、ステレンボッシュ大学では学費値下げを要求する学生デモを目撃した。ケープタウン大学 (UCT) においても、同様の理由で学生らがタイヤを燃やすデモがあり、その影響で私たちの訪問日程を変更する羽目になった。日本では一般的に抗議デモは過激で近寄りたくないイメージがあり、自分の政治的意見を大声で訴えることは「迷惑行為」という印象があった。しかし、アパルトヘイトやアメリカでの黒人差別撤廃運動において、抗議がそれまでの固定観念を打破した系譜を鑑みると、その重要性は明白であった。実際に UCT ではデモのおかげで学費が下がったので、時には効果はある。渡航前の私は先入観に囚われていたことを痛感した。

一般市民は家庭や大学などの日常生活で政治問題を盛んに議論し、その積み重ねが抗議文化の土台となっている。個人差や地域差もあるにしても、一般的に日本での日常会話において、政治を口にするのはタブー視されている。実際に、政治問題の議論に慣れていないせいか、私が UCT の院生と話していた際に、世界から注目されていた初の女性首相である高市総理について聞かれて答えに困った。

2点目にゼノフォビアと優越感について。南アを含め、移民・難民の受入国では、現地の人々が移民らに仕事が奪われることを恐れて排外的な態度をとるといふ。特にブルーカラーや日雇い労働者にその傾向が強く、教育を十分に受ける機会がなかったことも関係あることについてジェッピー公使からうかがった。課題は雇用不足や教育の無償化と質だけではないだろう。

日本でも移民・難民に対する排除主義が高まっている。その日本と南アの人々に共通する意識として、他のアジア／アフリカの国々よりも経済的に優れているという優越感があり、それによって他の国々出身の人を見下ろす姿勢につながり、それがゼノフォビアの一因であると感じた。特に日本人が持っている、自国は「先進国で支援する側にいる」という強い意識が、さらに発展途上国に対する優越感を肥大させているといえるだろう。

その優越感と関連しているのが、日本におけるアフリカのイメージである。今回の FS で、それまでテレビで見てきたアフリカの典型的なイメージである「貧しくてかわいそうな人たちが」180度変わった。一部のメディアは、アフリカ大陸全土を「支援が必要」という側面や、貧困・紛争といった悲惨な現実を強調している。そのため、メディアの視聴者は安易に同情や悲観的なイメージを抱いてしまう。両親からも「日本は恵まれているが、国外ではご飯を満腹に食べられない

人もいる」と教えられてきた。

実際、私が現地で関わった人達は陽気で優しく、人間性の豊かな人達ばかりだった。深刻な政治問題や暗い過去があるにしても、ビクターさんのように、そのような困難を乗り越えたり、あるいは困難と共に生きていくにはどうしたら良いか考えて、行動を起こしている前向きな姿勢の人が多くいるように思えた。なので、私たちは偏った報道に振り回されるのではなく、一度立ち止まって「実際は〇〇かもしれない」という懐疑心と想像力を働かせることが必要だ。しかしこのような批判的思考は、義務教育においては重要視されていないように思う。

3点目に、加害者と犠牲者について。奴隷制度⁽¹⁾とアパルトヘイトの加害者は白人なので、非白人が白人に対して怒りを持つことは当然かもしれない。その一方で、アパルトヘイト時代の日本人も「名誉白人」という加害者として、経済の恩恵を受けていたし、その他、日本は他のアジア諸国を植民地化した加害国であった。このような負の歴史を決して忘れてはいけないと思う。私自身も正義感に駆られて、自分や自国の過ちを振り返ることがなく、他者や他国に対する発言や態度が一方的になっていたり、過度に非難をしていないか自分を疑うようにしたい。

FS で学んだこと全体の共通点は、無関心と不正義感、自他への優劣意識の危うさである。これらが差別を助長する要因であると考えられる。差別は身近に起き、かつ誰もが持っている感情であり、自分と異なる人との差を否定的に捉えて除け者にする。そのため差別をなくすために、ある事柄・他者に対して関心を持続することが必要だ。自分に内在する差別意識と向き合い続けること、つまり、自分が持つ常識を疑い、他者との差を観察し、受容することこそ差別に立ち向かう方法だと考える。そして、差別を行う加害者側の心理についても、「なぜ自分／彼らが加害者側に立つのか？ それは恐れと無関心、社会で当たり前だとされている価値観からくるものではないか？」と自分／彼らの思考の背景を常に考えることが必要だと感じた。

最後に、私は南アに行くまで政治参加を意識していなかったのだが、FS をきっかけに黒人意識運動のリーダーで学生時代から活躍していたスティーヴ ビコ (Bantu Stephen Biko) に興味を持つようになった。彼に刺激を受けて、私は現在、地元の政策提案プロジェクトにかかわることで政治参加をしている。

(1) 南アの奴隷制度は17世紀にオランダ東インド会社によるケープ植民地支配から始まり、東南アジア、アフリカ各地から連行された人々が使役され、1834年にイギリスによって廃止された。ケープタウンのスレイブ・ロッジ (Slave Lodge) などの歴史的建物が残っている。『アフリカ NOW』編集部

木村 和香：

神戸女学院大学国際学部グローバルスタディーズ科3年生